

学問へススメ

～技術系営業マンの学位取得奮闘記～

第1回

佐藤 隆

営業マン、医学博士号取得

私は1980年初頭に某大学の理学部の化学科を卒業し化学メーカーに就職した。会社での配属先は技術系新卒が一般的に行かされる研究所や工場ではなく、本社に配属され、結局退職まで営業や企画の仕事を約20年続けた。その後脱サラし自分の会社を起業。自由の身となったため、以前から親交のあった医師の紹介で某大学病院の研究室に転がり込み、研究生として置いてもらうことになった。私にとって大学での研究活動は一生のうち一度やってみたい職業であった。そこで約8年間自分の会社の仕事を続けながら、主に土日に研究室に行って研究を続け、その結果を論文にまとめることができた。そして最終的にその論文で学位（医学博士）を取得できてしまったのである。現在、その学位が自営の会社の営業や製品開発の人脈作りに大いに役立っている。この連載を始めたのは、既に企業に就職しているが、仕事を続けながらなんとか博士号（学位）を取得したいと考えている技術系サラリーマンの方に私の経験が少しはお役に立てるのではないかと思ったからである。また、学位なんて何の役に立つのと思われる方に学位の意味やメリットを伝える事ができればと思う。

「猫の手」になり、便利屋になる

私は大学卒業後修士課程に進んでいなかったため、大学時代に書いた論文は無い。本格的な研究経験を持っていなかったため、大学に入っても実際に研究活動に従事できるかどうか全くわからなかった。鉄腕アトムやサンダーバードをTVで見て育った私は、

お茶の水博士や Dr.ブレイン (サンダーバードにでてくる科学者) にあこがれ、子供時代から科学博士が”カッコイイ” 一生に一度はやってみたい存在であったのだ。そんないい加減な動機で研究室に入ったものだから研究活動などすぐにできるわけがない。しかし運の良いことに、ほとんどの大学病院に所属する医師の先生方は、複数の病院の一般外来の診療と同時に、大学での研究活動を行っており、猫の手を借りてでも実験し論文を書かなければならない状況にあった。現在も同様な状況が続いている。そのため私のように化学系や生物系の大学を出ていれば基本的な分析や実験技術は持っていると思われたので、実験の手伝いをさせる猫の手として入学が許可されたのであろう。しかし、私はといえば大学を卒業してから20年も経過しており、おまけに営業職で生きてきたので、研究室に入ってもわからないことだらけ。研究室の諸先生に質問するには、あまりにも忙しくされていたので、聞くこともできない。当初は、研究室に入り込んでしまえば、教授からあれやれこれやれで仕事を言いつけられ、教えを請いながらお手伝いできればいいかなと考えていたが現実は甘くなかった。全く声が掛からないどころか研究室の皆さんに紹介すらしてもらえなかった。全く無視されていたのである。とにかく研究室に行き流しに置き去りにされたビーカーなどの洗い物や掃除をする日々を送りながらどうしたら研究というものが始められるものかと考えた。悩んだあげく思いついたのが、時々研究室を訪問してくる分析機器のメーカーの技術者に頼み込んで、使われていない機器の操作を一から教えてもらうことだった。研究室には、使われなくなった古い分析装置が所狭しと置かれていて埃を被っていた。新しい最新の分析装置は常に先生方が使用していたので、迷惑にならない実験方法は、既に使われていない実験装置を再起動させて利用することであると思われた。「新しく研究室に配属された研究者ですが…。(実は学生)」といえ、私の年齢もそれなりの歳なので、メーカーの担当者は、丁寧に教えてくれた。メーカーにとっても自社の分析装置が動き出せば消耗品や試薬の販売ができるので好都合である。

メーカー技術者の懸命の指導により、長年使われていなかった分析機器が動くようになった。そうすると研究室の先生方は動き出した分析機器で、自分の検体が分析できないものかと、研究テーマの検体について私にいろいろ聞いてくれるようになった。論文執筆にはある程度の図表の『数』が必要であり、メインの結果は最新機器で分析されたピカ新データが必要だが、そのデータを補足するその他多数の確認データが必要なのだ。私の動かした古い分析機器は、まさにその確認データを取得するのに好都合であり、従来の分析方法なので文献の引用も沢山でき考察も書きやすいので先生方の研究のお役に立てることがわかったのである。それだけでなく、他の分析機器についても、あれが動

かせないかと私に質問してくれるようになった。すなわち私はいつの間にか研究室の便利屋になれたのである。先生から質問があっても、こちらも他の分析機械のことは全くわからないので、「今は手が離せないので後でお教えしましょう」と言いい、一人になったところでメーカーに電話して詳しく教えてもらい、それをオウムの様に先生にお伝えすることを続けた。大学病院はドル箱なのか、メーカーの担当者はいつでも丁寧に教えてくれて、おかげで研究室の複数の分析機器について詳しくなり、私は“機械に詳しい便利屋”として先生方から頼られる存在になった。

ビデオ録画がノート替わり

私の場合、とにかくマニュアルを読むのが嫌いなため、ほとんどメーカーの技術者に来ていただいて手取り足取り教えてもらうだけなのだが、要領が悪く聞いてもすぐ忘れることがあるために、ビデオカメラでメーカーの担当者の作業を全て録画することにした。教える側の技術者にとっても私はビデオを撮影しているだけなので教える時間が短縮できこの方法は好評であった。「この装置のこのネジを外し、ここにセットされているピンを取り、カートリッジを取り替えます」というような三次元的操作は、ノートに取るよりもビデオで記録した方が遥かに記録しやすいし、後で自分で再現する場合も的確に操作できた。分解、部品交換、洗浄、組み立て、配線、試運転操作に至るまで、私は、研究室の分析機器に関するかなりの情報を集積していった。そして録画したビデオを帰宅後の暇な時間に再生して復習するのである。日頃分析装置を使用している研究者でもメンテナンス方法まで知っている人はそれほど多くはない。いつのまにか私は研究室で「〇〇さん」ではなく「〇〇先生」と呼ばれるようになった。ようやく“便利屋”から“研究者”への昇格である。大学に雇用された実験助手の職員はみな「〇〇さん」と呼ばれていたので大出世である。メーカーにとっても使われていない機械が動きだしただけでなく、メーカーの新しい試薬や新製品についてニコニコ話を聞してくれる私のような便利屋は貴重価値があるらしく、メーカー側からも私は一目置かれる“先生”になった。しばらくすると「あの先生にアポイント取るにはどうしたらいいですか？」など仕事とは関係ない相談もしてくるようになった。

エスカレートする指導

大学病院の研究室に 8 年在籍したといっても仕事の無い土日、連休、お盆や正月休みに

集中的に実験する日々を送った。最初は先生から頼まれた検体をひたすら分析するだけである。何の検体なのか、どんな実験なのか全く知らされない。聞いてもわからないだろうし、トンチンカンなことを聞いてアホだと思われたら困るのでこちらからも最小限のことしか聞かなかった。聞けなかったといった方がよいだろう。分析に次ぐ分析の毎日で単純作業の連続である。

最初の頃は私の出した分析結果を見て、難しそう顔をされて「ちゃんと分析したの？」と半信半疑で受け取っていた先生もデータが積み重なってゆくにつれ、「このデータは使えるぞ」→「これはすごいデータだ」→「このデータなら論文が書ける」ということになり、大いに喜ばれるようになった。数を打てば当たる！

ある時、私の分析したデータを見た先生が、たまたま自分の考察した理論に合っていたのか大喜びし、頼んだわけでもないのに共同研究者として名前を論文に入れてもらえる嬉しい事件が起きた。その事件以後、私の分析したデータを使用して発表するときは必ず私の名前も共同実験者として入れてもらえるようになった。しかし、一方で私に対する要求というか指導もどんどん難易度が上がっていった。例えば、分析作業も単なる機器分析だけでなく、「分析前の薬品処理も一緒にやって欲しい」ということになり、それができるようになると、「細胞や組織の処理方法を教えるから、抽出操作もやってくれない」となり、最終的には「マウスつかんだことある？簡単簡単……」ということで、最終的には実験の全行程を私一人でできるように仕込まれていった。全実験を一人でできるようになると、当然まとめの資料も作って欲しいということになり、エクセルでデータを集計しパワポで資料を作成して先生に提出すると、次回からは英文で資料を作ってくれという様に、次から次へと私に対する指導はエスカレートしていった。当時はこの先生はなんと次から次へと難しい宿題を私に出されるのかとと思っていたが、考えてみればすばらしい教育方法で短時間に私のようなアホな営業マンを一人前の研究者へと育ててくれていたのである。さすが大学の先生である。もちろん英語はメチャメチャ、統計処理も最初はコツがわからなかったが、そこが大学組織である。それぞれに卓越した先生方がいて丁寧に教えていただいた。教えていただく時間がない場合は、「そのチェックは外部に頼んどいて」ということで研究予算から外部のプロにお願いすることになった。私は研究組織の総合力というものを学ぶことができた。

真夜中の実験室

私は、小さい頃からプラモデルや細かい手作業が好きだったこともあり実験は苦にな

らなかったし、趣味のような感覚で単純作業に没頭できたので、大学病院での異空間での研究は会社での営業上のストレスに対する気分転換にもなった。とはいえ嵐の真夜中に大学病院の研究室で一人実験するのは慣れが必要である。私の場合大学病院ということもあり、多くの「医学的な（気色の悪い）」標本と隣り合わせの実験であった。サンプル保存のために冷蔵庫を開ければ「医学的なもの」が凍結されていた。見たくなくても睨まれてしまう器官もあった。

良いこともあった。真夜中の誰もいない研究室で長時間の単純作業ということもあり好きな音楽が沢山聞けたのだ。もともとクラシックが好きだったので、長時間の作業に対応できる長編オペラものにチャレンジした。特にワーグナーは、「ダラダラ長い作品」が多いので重宝した。トリスタン、タンホイザー、マイスタージンガー、指輪はもちろんのこと、お気に入りのパルシファルなどを何回も聞いた。ダラダラ音楽も聞いているうちに感動が込み上げてくるようになり気がつくやうに完全にワグネリアン化した自分に気付いた。実は去る 5 月 22 日（ワーグナー生誕 200 年祭）に私はバイロイトの地にいたのだ。そこまで“汚染”されてしまったのは研究生活の喜ばしい副作用である。感動することを忘れかけてきた中年男に全身に震えを伴う感動を呼び戻してくれたワーグナーに今は只感謝している。POP、JAZ 系では、尾崎豊、小野リサ、オスカーピーターソンなどのアルバムの全曲聞破（読破の類似語）などに挑戦した。今でも時より頭の中でそれらのメロディーの断片が鳴り響く。

突然の学会発表、そのチャンスを活かす

私にとり幸いだったのは、手伝いの延長から始まった分析作業なので、少々失敗があっても文句を言われなかったことである。「次回はこれに気をつけてよね」と大変丁寧に扱って頂いたのも幸いであった。私は研究生のため大学で雇用された実験助手と異なり、当然無給であり、年間の授業料を払って席を置いてもらっていたので、客人待遇だったわけだ。実験助手の方にはかなり厳しく叱責されることもあったので、申し訳ないと思っていた。そこでたまに実験助手の方々を食事に誘ってあげることにした。年齢は私の方が遥かに上であったし、小さな会社であったが肩書きも一応社長であり、近くの定食屋で実験助手の方々に食事をおごるのは自然なことであった。こうして、いつの間にか実験助手の方々からも絶大な協力を得られるようになり、午後 3 時になると「先生お茶が入りました」と呼びにきてくれるほどになった。

見様見まねで英語のプレゼン資料を作成するようになったある日、教授から突然「今

度の学会に、この実験をやっていた〇〇先生が都合で行けなくなったので、この発表をしてきて下さい」と言われ、突如としてファーストオーサー（演題の筆頭研究者）で発表をすることになった。しかし、発表しろと言われても私はこの分野の専門家でも何でもないわけで、実験の背景などほとんど理解していなかったし、学会で専門家から質問されても答えられるはずもない。「発表原稿は〇〇先生が用意したものを棒読みしてください。それと、この本にこの実験で必要なことが全部書いてあるから読んでおくように」と一冊の分厚い専門書を先生からポンと渡された。結局何もわからない素人がいきなり学会発表するハメになってしまったのである。その学会は発表後の質問時間が4分あり、私のような中年の研究者が会場からの質問に全く答えられないという悲惨な事態を想像した。なんとかしなければ思い、しかたなく渡された専門書を学会までに必至に読んで勉強することにした。それからの日々営業で出張する時も必ず鞆にその専門書を入れ時間が許す限り読むことにした。読むというよりまさに噛み砕けない本に必至でかじり付いていたという感じである。結局わからないことだらけの状態当日を迎えた。

しかし、幸運の女神というのは存在するものである。当日の私の学会発表では、前の演題に議論が集中しすぎて予定時間を大幅に超過していたため座長が、「時間が押してますので特になければ次の演題に移ります」との一言。結局、質問に答えずに済んだ訳だが、想定問答集を徹夜で山のように作って準備していたため、なにか物足りなさが残った最初の学会発表であった。しかし、この学会ために強制的に難解な一医学分野の勉強をしたことで以前と比較にならないほどこの実験の背景を理解できるようになった。多分〇〇先生から口頭で教えていただいても全く頭に入らなかったと思う。自分で勉強する場合は、要領を得ないので解らないながらもかなり広範囲の文献を読むために全体の中の位置付けというものが解るようになったのである。これはすごい進歩だと自分でも感心した。

学会出席の収穫は非常に大きかった。特に自分の発表に関係する演題を片っ端からボイスレコーダーに録音し、デジカメで発表スライドを撮影していたことが役立った。後でその録音を何度も聞き返すうちに、最初は何を言っているのかわからなかった発表内容を次第に理解できるようになった。一応の知識は学会前の専門書から得ていたことも幸いし、録音を聞くうちに専門単語や慣用文節に耳が慣れてくると、発表内容が理解できるようになっていった。さらに、ベテランの先生方の発表を全て録音していたため、上手な発表のコツも次第にわかるようになってきた。録音を聞けば聞くほどベテランの発表に比べて私の棒読みのプレゼンテーションが恥ずかしくなってきた。これが大きな収穫であり、自分の発表の悪いところを改良しベテランのプレゼンの良いところをまね

すれば良いのである。今度発表する時はこうしようというメモ書きが山のようにになった。

四十代の大学生活は一生の宝

私にとり40代から始まった新しい大学生活は、非常にエキサイティングなもので一生の宝物となった。後半には、数々の学会に出席させてもらえて興味深い体験をした。海外の国際的な医学会にまで遠征し、米国やドイツの学会で発表した。国際展示会での営業経験はサラリーマン時代から多少あったので大きな問題はなかったが、レセプションパーティーでの社交ダンスやパリの高級サロンでの少人数の茶会はさすがに白旗を降って逃げ出すしかなかった。社交ダンスの経験やフランス語の会話を楽しめる教養があればどんなにか楽しめたであろう。それでも蝶ネクタイとタキシードに身を固めてシャンパンぐらいは飲めるようになった。これも慣れが必用で最初は恥ずかしい失敗をした。パーティー後の記念写真で私の蝶ネクタイだけが、90度曲がって垂直に立っていたのである。どうしてこんなに曲がるものなのか不思議なくらい垂直に近い状態で立っていた。多分シャンパンの飲み過ぎでおかしなことになってしまっていたのだろう。パーティーでは紳士は自身の身なりがふしだらになっていないように気を配らなくてはならないのだ（この写真は研究室では大いに受けたが…）。テーブルナプキンをズボンに挟んだままトイレの鏡を見てはじめて気がついたこともある。学会前の疲労と時差で招待された劇場で寝てしまったのも、全く持って恥ずかく悔しい記憶である。そのときの演目はニューヨークシティーバレエのジゼルであった。よりによってジゼルはバレエ音楽の中では後半一番眠気を誘う……。

しかし、海外の有名研究所や病院の見学等、普通では到底できない体験をたくさんさせてもらえることとなった。この極めてエキサイティングな体験を多くの若いチャレンジャーにも体験してもらいたいと思う。学位を志す若人諸君、社交ダンスと初級フランス語は必須ですゾ！！（冗談です。） 【続く】